

イギリス障害者福祉制度におけるパーソナル・ヘルス・バジェットの導入と影響 ーパイロット・プログラム参加者に対する質的調査からー

関東学院大学 麦倉 泰子 (4974)

キーワード イギリス障害者福祉制度 パーソナル・ヘルス・バジェット 質的調査

1. 研究目的

イギリスでは 1990 年代後半から障害のある人に対するケアの個別化政策が進められている。サービスの代わりにケアにかかる費用を現金として直接支給するダイレクト・ペイメント制度の導入に端を発する制度改革は、当初は社会的ケアのニーズのある人だけに限られていたが、徐々にその対象者の範囲を広げ、最近では医療的なニーズのある人までを含むこととなった。パーソナル・ヘルス・バジェットと呼ばれるこの制度の創設にあたっては、受給方式の変更、支援スタッフのトレーニング、ケアを行う場所など、「制度としてのケア」を支えるありとあらゆる価値観と法的な枠組みを変える必要性があった。本報告では、制度の創設とパイロット・プログラムの導入に関わった人たちに実施したインタビュー調査をもとにして、医療的ニーズを持つ障害のある人に対するケアの個別化の様子を記述することを目的とする。さらに、その意味するものについて、イギリスの社会学者クレア・アンガーソンのケア労働と感情との関係についての議論を手掛かりとして分析を行う。

2. 研究の視点および方法

本報告は 2013 年にイングランド北部において行った調査をもとにするものである。パイロット・プログラムに参加した家族に対して行ったインタビュー調査をもとに、「パーソナル・ヘルス・バジェット」と呼ばれる制度の創設によって家族やケアワーカー、支援者たちの関係にもたらされた変化について調査を行った。

3. 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、事前に調査の趣旨、質問項目、録音の許可、論文への使用についての説明書を調査実施前に対象者に対して渡し、内容について確認を行ってもらい、同意書への署名を得た。また、データの取り扱いにあたっては、匿名性の確保に最大限配慮した。

4. 研究結果

分析の結果、パーソナル・ヘルス・バジェットの導入によるケア関係の変化として、次

の4つの領域が析出された。

1. 金銭、時間、場所といった具体的な「資源の管理」
2. ケアを行うスタッフとの「関係性」
3. 本人が必要とするケアに関する「知識」
4. スタッフへのトレーニングである「訓練」

上記の領域における変化によって本人の日常生活が安定し、生活の質が全体として向上していることが伺われた。ケアワーカーの観点から見た時にも、勤務の継続性が高く、障害のある本人、家族と良好な関係が築かれていることがわかった。このような良好な関係性が構築されている要因は、募集の段階で友人や知人など、すでにある程度の信頼関係がある人たちのネットワークを利用していること、本人、家族がどのような人を雇うか選ぶことができることであると考えられる。さらに、柔軟な勤務時間やローテーションの組み方によって、ケアラーの側から見て勤務の形態が選択しやすく、働きやすい環境であるかどうか大きな要因である。

また、スタッフに対するトレーニングにおいても、本人のニーズに合わせた個別のトレーニングのプログラムを家族が実施することが認められていることによって、本人の身体的に安定した状態がもたらされ、スタッフの勤務を継続する上での不安も払しょくされることにつながる。

このようにして、ケアラーが働く期間が長くなっていくにつれ、本人、家族との間で時間を共有し、生活誌（バイオグラフィー）が共有されていく様子がわかる。共有される時間が長くなるにつれて、ケアラーたちは他に代わりのきく「人的資源」ではなく、徐々に「かけがえのない」「あなたでなければならない」存在へと変わっていくのが見て取れるのである。

5. 考 察

上記の事例からは、家族とケアラーは、本人に対するケアを媒介としながら時間、場所、経済、知識を共有する一つのミクロな共同体を形成していく様子を伺うことができる。これはクレア・アンガーソンが契約に基づく労働と、愛情に基づくケアが入り混じった新しい形態として定義づける「ケアのハイブリッド」としてのダイレクト・ペイメントのスキーム（Ungerson 2005）における新たな関係性の可能性を指し示すものである。